



## 真冬の空に

### 山末やすえ

#### プロフィール

近著は『あえてよかったね』。  
「現在、伊豆高原の家と九二歳になった東京の母の元を歩き来している日々です。」  
『幸せの青いチリトリ』ほか。

ナオはこたつの上のミカンに手をのばした。

テレビを見るくらいしか、することないもんなあ。

となりの座敷からは、にぎやかな笑い声がきこえてくる。

毎年のお正月、一月二日は、おじいちゃんとおばあちゃん

の家に集ってお祝いする。

「みんな、ずるいよ」

今年も、サトル兄ちゃんもいとこのカオルちゃんもタツ

ちゃんも、理由をつけてこなかった。子どもはナオひとり

だけだったのだ。

ふと、視線をかんじた。

来たときから気になっていた障子の穴。

ナオはそっと立って行って穴をのぞいた。すると、廊下

に女の子がいた。胸にまっ赤なバラの模様がししゅうして

あるもこもこの白いセーターに、濃い緑のコーデュロイの

スカート。白いタイツをはいている。なんか、ダサイかん

じの女の子が。

「お・い・で・よ」

女の子の口が、そういった。障子をあけて廊下になると、

女の子は、「あんた、たいくつそう」といって笑った。

だれだろう？ 近所の子かなあ？ じろじろ見ていたら、

「これ、よそいき。お正月だからね。いいでしょ。母さん

がししゅうしてくれたんだ」

女の子は、得意げに胸のバラを指さした。

「あんた、だれ？」

きこうと思ったらそれより先に、

「あのね、いいことおしえてあげる」

女の子は、しーっと口に指をあてた。

座敷から、また大きな笑い声があがった。

「こっち、こっち」

廊下のガラス戸がすこしあいていた。きっと、にぎやかな

声にさそわれてやってきたにちがいない。女の子はする

りと外にでた。ナオも外にでた。

「うー、寒い！」

おもわず両手で自分をだきしめた。